

2009年12月8日

九州大学大学院経済学研究院
産業マネジメント専攻長 村藤 功 様

出張等報告（記録）書

報告者

ICABE 学生交流推進プロジェクト

教員代表

経済学研究院 教授 出頭 則行

同 教授 平松 拓

学生代表

産業マネジメント専攻 2 年 岡本洋幸

記録

産業マネジメント専攻 1 年 西野晶子

大学改革推進等補助金による出張を下記のとおり行ないました。大変遅くなりまして恐縮ですが、ご報告申し上げます。

記

1．費用の負担

平成21年度大学改革推進等補助金

2．プログラム名称

ICABE 学生交流推進プロジェクト（第11回）

3．用務地

中国・大連

4．用務先

JETRO大連事務所、大連遠東数碼有限公司、大連理工大学

5．用務の概要と事業の関連

（1）用務の概要

大連現地企業視察、学生間討論会

（2）事業の関連

International Consortium of Asian Business Education (ICABE) に基づく学生間交流事業の一環として、大連の最新事情把握によるアジア市場に対する理解の深化、ならびに提携先ビジネススクールとの連携強化のためのネットワーク形成を図る。

6. 出張日程

2009年8月14日(金)～16日(日) (希望者は17日(月)まで延泊)

7. 参加者 合計16名

<教員> 2名 出頭教授、平松教授

<産業マネジメント専攻1年> 8名

岡本洋幸(学生リーダー)、池田泉、石田保憲、井上透、小林亜希子、杉本将隆、宮本伸治、八尋大八

<産業マネジメント専攻2年> 6名

市川克、楠元珠代、西野晶子、秦野久実子、真鍋道子、丸山智恵子

8. 日程詳細

8月14日(金)

10:10 福岡空港国際ターミナル集合

10:30 待合室にて出発式

12:20 福岡空港発 CZ646便

13:10 大連空港着、貸切バスにて大連市内へ移動

14:30 JETRO大連事務所 訪問(大連の概況・日本企業の動向等)・・・活動報告

16:30 大連遠東デジタル有限公司 訪問・見学 ・・・活動報告

19:00 ホテル 到着

19:00 夕食

〔宿泊〕 ラマダプラザ大連

8月15日(土)

07:45 ホテル出発

09:00 大連理工大学(以下、DUT)大学 到着

(1) DUT 劉教授による特別講義 ・・・活動報告

(2) QBS 平松教授による特別講義 ・・・活動報告

(3) 大連理工大学との交流セッション

・Japanese Food in Dalian(DUT) ・・・活動報告

・中国における薄毛対策ビジネスの提案(QBS) ・・・活動報告

(12:00 DUT食堂にて昼食)

・Business Incubator in Dairen(DUT) ・・・活動報告

・FOOD and CLEAN ENERGY For YOUR HEALTHY LIF(QBS)・・・活動報告

15:30 貸切バスにて大連市内観光(大連港、星海公園、老虎灘海洋公園など)

18:30 DUT教授・学生との懇親会

〔宿泊〕 ラマダプラザ大連

8月16日(日)

06:45 ホテル出発、貸切バスにて大連空港へ移動

08:45 大連空港発 CZ645便

11:20 福岡空港着、解散

(平松教授、井上、小林、宮本、八尋、西野、秦野、真鍋、丸山。出頭教授は大連から東京へ帰国)
希望者は市内観光・延泊

8月17日(月)

08:45 大連空港発 CZ645便

11:20 福岡空港着、解散

(池田、石田、岡本、杉本、市川、楠元)

以下、活動報告および参加学生感想

【活動報告】企業訪問「JETRO大連」

説明者：JETRO大連事務所 淵田様

報告者：QBS6期生 岡本洋幸

大連市の人口は約600万人で、気温は夏が30度を超え冬がマイナスとなるものの、日本と同様に四季がはっきりしており、中国では過ごしやすい土地と言われている。緯度で見ると仙台市と同じくらいである。

戦前は満州鉄道の本社などが置かれており、日本人にとっては馴染みの深いまちである。また日露戦争の舞台となった旅順に近く、今年放送される「坂の上の雲」により、日本人観光客の増加が期待されている。なお、外国人観光客は年間86万人で、その半分以上が日本人である。

大連市は日本の地方自治体との交流が盛んで、なかでも北九州市との交流の歴史は1979年からと古く、大連市内には交流を記念した「北大橋」がある。

北九州商工会議所とFFGが大連市内にチェレンジショップを設置しており、販路を拡大したい日本企業が製品を展示している。

大連市は環境への取り組みが熱心で、エコカー導入のモデル都市に政府から指定されている。環境に優しいバスの導入などがすすんでおり、ライトレール（路面電車）も整備されている。

主要産業としては、IT、造船、物流などである。ITは大連市のGDPの4%を占めており、日本向けBPOが盛んである。ITについては、日本向けにコールセンター業務やシステム開発を行っている。日本のクレジットカード申込書なども、大連で入力作業が行われている。大連としては、日本企業のITに関する業務の数%しか海外に発注されておらず、今後は10%程度の業務を請け負いたいと考えている。

造船は、韓国の造船大手STXが大連に進出している。物流については、大連港はもともと水深が深い良港であることから、東北3省や日本向けの流通加工拠点としての機能を担っている。

貿易については、日本は大連最大の輸出相手国であり、2008年の輸出額は73億ドル、輸入は中東に次ぐ2番目で42億ドルとなっている。

不凍港である大連港は重要港湾で、物流における東北3省の窓口である。2007年のコンテナ取扱量は381万TEUとなっており、中国では8番目、日本最大のコンテナ港湾である東京港とほぼ同規模である。

大連の外資系企業は1万3,000社で、日系企業は約4千社となっており、次いで、香港や韓国系企業が多く進出している。大連には、パナソニック、東芝、今岡造船、ローム、トステム、キヤノンなどが進出している。

【活動報告】企業訪問「大連遠東數碼有限公司」

テーマ：日本企業向け情報システムに関するオフショア開発

説明者：大連遠東數碼有限公司 楊曉春氏、彭建華氏

記録者：Q B S 6 期生 宮本伸治

【大連におけるシステム開発事業】

- o 同社は日本市場の更なる開拓を目的として、20世紀末に設立された情報システムの開発企業である。この10年程の間に、日本の総合電機メーカー、電力会社、大手流通企業等の情報システム開発を受注した実績を持っている。
- o 日本企業のシステムを開発するにあたっては、受注元である日本企業の担当者とのコミュニケーションミスを防ぐため、まず日本語を習得させることに力を入れている。また、システム開発の手法についても差異が存在するため、社員を日本へ長期派遣してその開発手法を体験させて学ばせている。

【事業・成長戦略】

- o これまでは、開発工程の上流で設計された内容を作りこむ、下流工程である「PG」工程を受注・担当することによって、業績の拡大を図ってきた。今後は、マージンの大きな上流工程の受注を伸ばしていく意向である。
- o その戦略実現のためには、日本語でのより高度なコミュニケーション能力を有するSE：システムエンジニアの育成が肝要である。このため、通常の就業時間後に3回/週程度の頻度で従業員に日本語教育を行っている。

【今後の課題】

- o 事業拡大のためには人材、特に優秀なSEの育成または獲得が重要である。しかし、昨年の労働法の改正によって、個人の権利が大きく保護されることになった。このため、他企業、特に欧米企業からの引き抜きが激しくなっている。
- o SEの育成には時間がかかるが、システム開発は人材の質に影響を受けるため、特に、若くて優秀な人材の離職率をいかに低く抑えていくかが、今後の課題であると認識している。

【所感】

この会社は、政府から「ハイテク企業」、監督官庁から「国家重点ソフト開発企業」として承認を受けるなどして、税金の一部免除を受けている。そのことは、財務面だけでなく、人材獲得等の面においても好影響を及ぼしている。おそらく、中国のIT産業の急速な発展を体現する企業の一つと言って良いのだろう。

【活動報告】大連理工大学特別講義

テーマ：The history of industry in northeast China

発表者：大連理工大学 劉 曉冰 先生

報告者：Q B S 6 期生 八尋大八

発表内容

本発表では中国の東北地域にあたる黒龍江省、吉林省と遼寧省の地理的特性と歴史的背景やその経済的発展と中心市となる大連市と日本の関係などについて発表が行なわれた。

1. 東北三省の地理的、歴史的成り立ち

中国における黒龍江省、吉林省と遼寧省の東北三省は大興安嶺山脈を中心とした3つの山脈に囲まれており、それを隔ててモンゴルやロシア、そして朝鮮半島と国境を接している。そのような地理的特徴から古来、胡荻、夷荻や蒙古と鮮卑族や満州族などの中国周辺の外部民族との関わりが強い地域であり、現在でも複数の民族が融合しているということが特徴的であった。発表の中でも民族融合という言葉が繰り返し引用されていたことから、中国の中においてもそういった意味において特別な地域なのであろう。

歴史的には鮮卑族の北魏、蒙古族の元や女真族の建国した金などの外来政権が活躍した地域であり、ロシアによる支配と日露戦争の舞台となったり、満州国建国による日本の統治など日本とのかかわりも深い。中国と日本の間で起こった過去の悲しい戦争のことを考えると中国人の反日感情というものも予想していたが、大連の人々は非常に親日的であり、その理由について発表の中では日本資本による大連の街づくりや満州鉄道の建設などのインフラ整備への貢献について言及されていた。これは経済の副次的な効果であるが、改めて持続的な経済発展の可能性と平和への貢献について考えさせられた。

2. 大連の経済的特徴

大連市とその周辺は東北三省を中心に天然資源が豊富な地域であり、人口は全体の8%だが、石油の生産量は40%、マグネシウムにおいては85%を産出する。また良質の鉄鉱石を産出される地域としても知られ、古くからの重工業地帯として栄えてきた。しかし、1990年代に入ると設備やシステムの老朽化から生産効率が落ち、昔ながら人海戦術では経費がかさみ徐々に低迷していった。しかし、1949年から始まった5カ年計画に基づいて改革が行なわれた結果、現在では主要な重工業地帯として以前にもまして繁栄しようとしている。また、日本との距離も非常に近く、親日的な環境も手伝ってかITサービスを中心とする日本向けのビジネスが非常に多い地域でもあり、今後も両国間の経済的な発展と関係の維持において重要な役割を果たすことが期待されている。

【活動報告】 QBS 教授特別講義

テーマ：世界的金融危機

発表者：QBS 平松教授

報告者：QBS 7 期生 丸山智恵子

米国不動産バブルの中で、サブプライムローンやその他資産抵当ローンにより組成された RMBS、CDO といった証券化商品が急激にその残高が増加し世界市場へと流れ込んだが、2006 年後半に不動産価格がピークに達した後は価値が著しく落ち込んだ。2008 年秋のリーマンショックを契機に金融危機へと発展、影響は金融業界だけでなく自動車産業にも及び、GM やクライスラーはチャプター 11 の適用申請に至った。これを受けて世界の資本市場も 2009 年 3 月には規模が半分以下にまで落ち込み、金融危機は経済危機となり、あらゆる製造業における設備稼働率の低下を招いた。

日経平均も 2009 年 3 月 8000 円台へと大きく落ち込む一方、円高が進み 1 ドル 90 円台となった。日本の金融機関の米国不動産関連証券への投資は限られていたため、当初金融危機の日本経済への影響はあまりないと考えられていたが、保有株式資産が証券市場の落ち込みにより大きな損失を被り、企業からの融資に応じることができなくなった。また、米国の耐久消費財需要の落ち込みにより世界の輸出が縮小、中でも日本の輸出の減少は、同様の影響を受けた中国・韓国などのアジア輸出国の中でも最大であった。

この危機を乗り切るために、G20 は GDP のプラス成長を回復し、金融市場を安定させるため多額の資金投入を行い、IMF あるいは ADB などの国際機関の機能を強化することを決定した。米国では経済安定および景気刺激のため多額の公的資金を投入した。日本でもこの危機に対応するため、国内的には金融あるいは税金面での対策が実施され、総選挙は延期された。国際的にはアジアの経済成長を支えるため ODA を通じた資金援助が決定された。中国政府は輸出減少を補うため内陸部の需要喚起を行うとともに公的資金による投資を行い、景気刺激を図っている。

このような各国政府の素早い対応により景気は底を打った感があるが、これまで世界の経済成長を支えた米国の消費は破たん状態にある一般家計が B/S を改善し、貯蓄率を押し上げる必要があるため、回復は遅いとみられる。したがって、アジア諸国にとっては米国消費依存体質を改め、国内あるいは域内消費需要をいかに創造するかが今後の課題となる。こうした中で、アジアの企業、なかんずく日本の企業にとっても主たるアジアが主戦場となる。優れた製造業企業が多く立地する市場での競合は、価格の引き下げではなく、如何に市場の需要に応じていくが問われる。

【活動報告】DUTプレゼンテーション

テーマ：Japanese Food in Dalian

説明者：大連理工大学 Jessica Ma & Sue Yu

報告者：QBS7期生 真鍋道子

(1)大連市について

概況

人口	6百万人
面積	12,574 km ²
GDPは	3,860億人民元
市の予算規模	340億人民元(対前年比27%増加)
平均月収	約3,000人民元

消費者物価指数の上昇率

項目	上昇率
衣服費	97.10%
娯楽費、教育費	97.60%
交通費、通信費	97.70%
嗜好品(酒、タバコ)	102.60%
住居費	103.00%
医療費	104.60%
家事サービス費	107.10%
食費	110.60%

食品ビジネスのポテンシャルについて

- ・ 食品に対する高い購買力を持っている
- ・ 地理的に日本と近いので、輸入の際の輸送コストを抑えることが出来る
- ・ 市内には、カルフルなど外資系も含め27のスーパーマーケットがあり、輸入品を購入する消費者も多い

(2)日本食の現況

日本食レストラン

海の子(2) 大名(3) 菊(4) 紅葉(2) 大江戸(4)

カッコ内は市内の店舗数

市内には日本食レストランも多い。ほとんどは中国人による経営。

日系外食チェーン

吉野家、味千拉面など、多くの日系外食チェーン店が市内に点在している

価格は低価格帯

スナック菓子他

不二家のチョコレートや日清の植物油、インスタントラーメンなどは、多くのスーパーで取

り扱っていて、市民の食文化に溶け込んでいる

販売チャネル

多くはスーパーマーケットでの取り扱いによるもの

(3)日本食ビジネスのチャンス

外資系チェーン店の成功事例

- ・ ハーゲンダッツアイスクリーム
- ・ スターバックスコーヒー
- ・ ピザハット

いずれも高価格帯の商品で、成功を収めている

大連での日本食ビジネスの脅威

1. 韓国

<理由> 市内には多くの韓国人
多くの店は韓国人によって経営されている より伝統的(韓国的)
韓国TV番組が放映されるなど文化交流が活発

2. その他の障壁

高価格帯

少ない販売チャネル

十分でない販売促進

これらによって十分な利益が確保できなくなる可能性ある

ビジネスチャンス

大連市民にとって日本食は、受け入れられているので、市場調査を行ったうえで、市場投入すれば十分に成功するチャンスはある

【活動報告】QBSプレゼンテーション

テーマ：中国における薄毛対策ビジネスの提案

説明者：QBS6期生 杉本将隆、八尋大八、小林亜希子、石田保憲、

7期生 市川克、楠本珠代、西野晶子、

報告者：石田保憲

概要：中国は以前の日本と同様に急速な経済の発展、高齢化社会への移行が進んでいる。我々は今後の中国において日本の薄毛対策ビジネスの市場機会があると考え、DUTの学生に対して同ビジネスの紹介と中国での展開可能性を提案した。

発表内容：

発表の導入として、薄毛にマイナスイメージを持つ文化が今昔問わず世界中に存在していた点、多様な原因がある薄毛において最も大きなウェイトを占めているのはストレスである点、人が豊かな髪に好意的である（これはDUTの学生も同意していた）点を指摘し、世界的な薄毛対策の市場価値を示した。

続いて日本の薄毛ビジネスにおける商品を5種類（かつら、育毛剤、植毛・増毛、育毛ケア、またビジネスという趣旨から逸れるが薬学的治療も）紹介した上で、その中でかつらの割合が7割と圧倒的に多く、かつらを利用する女性は60歳以上の年齢層で高い割合を占めている点（なお男性は30歳前後）から、今後高齢化の加速に伴い薄毛対策ビジネス全体の成長が見込まれると予測した。またSWOT分析により、日本の薄毛対策ビジネスにおいて、顧客との信頼を構築するための顧客情報処理・管理能力、個人に合わせた製品・サービスを提供できること、高度な技術（例としてアデランス社が無料で提供している人工毛髪品質チェックキットを配布）の3点が強みである事を述べた。

今度は中国の現状として人口の推移を掲げ、日本と同様に高齢化社会へ向かうこと、薄毛になると見込まれる人口が日本の7倍に上ると予測されることを指摘し、中国の薄毛対策ビジネスの成長可能性を示した。

最後に日本のビジネスモデルである1to1の顧客対応に、発毛治療として漢方薬の処方を組み合わせることを提案し、このビジネスの展開可能性に関する意見交換を行った。

質疑：

非常に興味を持って下さった様子で多数の質問・コメントがあったが、ここでは特に発表に関係の深い内容だった3点を挙げる。

- 1to1でのビジネスだと拡大する速度に限界があると思われるが、何か対策はあるのか 治療やかつら（髪型）のメンテナンスで顧客から継続的な収入が見込まれるため、急速に顧客を増やす策を構築する必要は無いという見解を述べた。
- 体質によって治療法は異なるのではないかと
アデランス社の商品ラインナップからシャンプーを例に挙げ、頭皮の質に応じて数種類の商品が用意されている事を示した。
- （コメントとして）法的な制約や使用許諾・ライセンスの検討が重要となるだろう

【活動報告】DUTプレゼンテーション

テーマ：Business Incubator in Dairen

発表者：大連理工大学

報告者：QBS6期生 井上透

<発表概要>

1. 数

1991年に初のインキュベーターが成立し、現在のインキュベーター数は33である。専門的なインキュベーターは16あり、その分野はIT、バイオテクノロジー、海洋、農業である。インキュベーター企業の8割は大学もしくは研究機関との合弁である。インキュベーターの広さは1,600,000m³である。これまでに1000企業が巣立っていった。最大ローンは100百元である。ハイテクインキュベーターでは現在335社存在し、219社巣立った。

2. サービス

サービス内容はITサービス、人事、コンサル及び代理店、広告及びマーケティングである。

3. 優遇政策

優遇政策には、法人税、関税、土地、専門家の政策がある。法人税では利益を生み始めてから2年間法人税が免除され、3年目から5年目までは50%が免除される。ハイテク商品の輸出に関税はかからない。ハイテク機器及びソフトウェアの輸入には関税がかからない。100から300m³の場合、1年目は50%が免除され、2年目は25%免除される。もっと大きな土地であれば、免除の幅は更に増える。専門家の待遇では、法人税の償還、ボーナス、自宅購入割引がある。

4. 入所の流れ

コンサルタントし、土地の選択をして資料を提出する。審査にパスすれば会社名を考え、契約書を作成し契約金を収めて、登記を行う。

<所感>

昨今、中国人技術者の活用が徐々に進んでいるが、まだまだ本格的な技術協力、グローバル採用という観点での人材活用は進んでおらず、飽くまでも「安価な労働力」という観点での中国人活用に留まっている。しかし今回の発表を聞いて、グローバル競争が過熱する中国において、技術人材を育てる国家的な仕組みを学ぶことができ、今後は中国人技術者を「より高度な技術を持った労働力」として捉えることになる日も近いと感じた。

また日本企業が中国に進出する際に、インキュベーター企業を利用することが非常に有効だと感じた。例えば大連であれば、大連のインキュベーター企業にコンサルや市場調査の実施をお願いすれば、より確実にそして安全に進出することが可能であり、特に日系中小企業にとってはリスク回避できるし、中国特有のネットワーク構築の為にも利用すべきであると感じた。

【活動報告】QBSプレゼンテーション

テーマ：FOOD and CLEAN ENERGY For YOUR HEALTHY LIFE

発表者：QBS 6期生 岡本洋幸、池田泉、井上透、宮本伸治、

7期生 秦野久実子、真鍋道子、丸山智恵子

報告者：秦野久実子

<主題>

福岡を代表する企業及びその取組を紹介するために、株式会社やまや及び株式会社九州電力をとりあげ、「私たちの豊かな暮らしのために。」というテーマに沿って食と環境という二つの観点からアプローチした。

株式会社やまや 中国における明太子ビジネスへの誘い

福岡の代表的特産物である明太子を紹介した。まず、日本における明太子のとらえられ方や歴史、食べ方等を紹介した。続いてファイブフォース分析で明太子ビジネスの利益ポテンシャルを分析した。その結果、需要の減少、代替品の急増、供給コストの上昇、簡単な製法であるため参入障壁の低さをあげることで、日本における明太子市場は縮小しているという見解に至った。いざ中国に目を向けてみて、中国で明太子ビジネスが成功するかどうかという問題提起をした。中国における日本食ニーズを調べてみると、味千ラーメンや元気寿司といった日本食レストランがチェーン展開されており、すでになじみのある日本食は人気を博している。一方、ある調査によると日本食をほとんど食べたことがないという中国人もかなりの割合でいることがわかった。そこでマーケティングミックスを行い中国における潜在顧客を取り込むために次のような提案を行った。

Product：中国では希少な日本独特の高級食材としての明太子。

Place:調味料だけは日本から入手し製造は中国で行い、高級なデパートで販売する。

Promotion: 口コミ及び明太子料理のレシピの紹介。

Price: 主に贈答用。

中国の大都市圏にいる駐在日本人や中国人富裕層をターゲットとして、福岡の名産の紹介とニッチ市場における明太子ビジネスの可能性を紹介した。

九州電力株式会社 持続可能な社会のための取組み紹介

日本のGDP成長とエネルギー需要の相関図を提示し、経済が成長する時にはエネルギーは必要不可欠なものであるが、同時に我々は環境問題にも向き合わなければならない時期にきているという問題提起をした。そこで、現在CO2排出量を大幅に削減できる非化石燃料の発電事業に取り組んでいる九州電力の企業概要と特筆すべき取組を紹介した。ここでは九州域内で取り組まれている特色ある事例である太陽光発電とバイオマス発電について紹介した。太陽光発電は大牟田市で現在着工中であり、完成すると一般家庭900軒分の電気を賄える規模の電力を発電するというもの。もう一つのバイオマス発電は宮崎県川南町にある鶏糞を利用した日本最大級の発電所であり、燃料である鶏糞を焼却後は肥料として再利用できる環境にやさしい電力供給である。最後に九州電力から技術移転や研修生の受け入れといったような世界における取組事例を紹介した。

<所感>

明太子のプレゼンを始める前に、明太子をのせたクラッカーを DUT 学生に試食してもらった。そもそも明太子の味そのものが中国人に合わないから明太子の味を変えた方がいいという意見や、この生臭いものをどうやったら中国人に受け入れてもらえると思うのかといった、明太子の定義を覆すような国独自の嗜好の問題から、最小の資本金で明太子ビジネスを成功させるためには何をすればいいのかといったような実務的な問題にまで話が及んだ。また持続可能な社会に向けた電力供給のプレゼンでは九州電力の原子力の供給量等について興味を示され、環境面と安心面を重視した新エネルギーの導入検討以前に、中国において現段階では安定的に供給できる原子力発電の取組みの方が重要で関心が高いのかもしれないという印象をもった。このプレゼンを通して DUT 学生と QBS 学生との間で活発な意見交換ができ、大変有意義で刺激的な研修であったと考える。

参加感想

報告者：6期生 池田 泉

私たちが訪問する8月の平均気温は24℃、中国各地から観光客が訪れるシーズンと聞いていた。ところが連日の気温は34℃を記録し、大連の観測史上最も暑い日となり、まさに熱烈歓迎でICABEは幕を開けた。

中国東北地方を代表する都市・大連は、遼東半島の最南端に位置する中国有数の国際貿易港を持ち、日本をはじめ多くの外国企業が進出する経済先進地区であり、大通りに立ち並ぶ近代的なオフィスビルを目にし、百貨店で高級品やブランド品が売られている様子を見ると、中間所得層がある程度の厚みを持っており、経済的に活気ある消費市場として有望視できると実感した。日本統治時代に日本人が建設した歴史的な建造物がいくつも残されており、保存状態の良い建物が現在も使用されていることから、非常に親日的な印象を持った。

今回訪問した大連遠東数碼有限公司の社長が、「社員の日本語能力向上に力を注いでいる当社であっても、当社で支払う給料以上の能力開発は望まない」と話したのは興味深かった。働く者の権利は法律で守られており、転職を希望する場合は前日までに会社に通知すればよいため、能力のある者は転職に意欲的で、人材の流動化が進んでいるのだ。中国に進出する日本企業にとって、日本語能力の高い人材が集まる大連は魅力的である。しかしながら、同時に他の中国の都市と同じく、いかに能力の高い社員を繋ぎとめるかといった問題も抱えている。

DUTの学生たちとのプレゼンテーション交換セッションでは、切り口鋭く論理的な質問が飛び交い、彼らのステップアップに向けた真剣さや向上心の高さを感じた。それと同時にこちらのユーモアを十分に楽しむフレンドリーさも兼ね備えており、非常に有意義な交流を持つことができたと思う。さらに嬉しかったことがある。それは、昨年後期に交換留学生としてQBSに留学してきていた3名の学生との再会である。中国では、「ヒトとヒトの繋がり」は非常に大切にされ、ビジネスにおいても人脈が重要とされている。福岡で共に学んだ彼らと大連で旧交を温めた今回の出来事は、QBSのアジアでのネットワークを実感した瞬間でもあった。

最後に、この大連でのICABEを素晴らしくコーディネートして頂いた、岡本氏、張氏及び宮本氏に感謝の意を表したい。

今回初めて中国を訪れたのだが、メディアの情報だけで偏っていた中国に対するイメージを払拭でき、更に、もっと世界を知らねばならないと刺激を受けることができた。

まず飛行機で見た大連の景色は、都市部に高級・高層ビルが乱立しながら、すぐそばにはまだ人が住んでいるのかと思わせる建物群が見られ、貧富差の激しさを感じられた。(日本の高度経済成長期もきっと同じ様な光景だったのだろう。)それと同時に、中国の経済成長の勢いを脅威に感じた。この感覚を例えて言うと、アクセルを一杯に踏み込んだ車がスリップしながら進んでいるような印象で、じきにタイヤが噛み合っ爆発的な勢いで日本を抜き去っていきだろうと容易に想像できた。(既に抜かれているかも知れないが)

また、直接聞いたわけではないが大連の人たちはどんな話をしているにしてもビジネスの可能性を意識しているように感じられた。今の日本人は豊かな状態を起点に物事を見ているためあれは嫌だこれは危険だと言って二の足を踏んでいるが、おそらく中国は(失礼な表現で恐縮だが)今より悪かった経済状態を起点としているために、我々が不安に感じるものもきっと「前よりマシ」であり、喜んで挑戦できるのではないだろうか。そんな貪欲なまでの向上心が経済発展の源泉ではないかと感じた。

もちろんこれは人種や経済状態に限った話ではない。企業訪問の際、日本発の「餃子の王将」が中国で健闘していることを知って驚いた。焼き餃子を中国で売るなんてありえないと下馬評で酷評されていたにも関わらず、固定観念に囚われずに柔軟に現地へ溶け込んだ彼らには、確固たるパイオニア精神が宿っているに違いない。そんな事を思うと共に、未知の市場への事業展開ができるはずの自分が臆病風に吹かれていることを恥じた。

また、私は中国人が環境汚染に対して無関心だという偏見を持っていたが、大連の町はスモッグのような霧が常にかかっているねと DUT の学生に話したところ、この状況(環境汚染)は早く解決すべきだと言われ、環境問題への意識が高まっていることに驚かされた。自分が偏見で物事を見ていたことを最も痛感させられた出来事だった。驚くと同時に、中国で工業技術も環境意識も高まっているとなると日本の先進性が無くなってしまいそうで、日本が世界と渡り合うための特色を持つためには何ができるのかと悩ましくなった。今でも答えは見えていないが、少なくとも日本人が早い内に世界中の文化や現状に触れて日本を外から見る目を持つことは必要だろう。

今回の研修は、様々な自分の偏見を改めさせてくれて、自分の目で確かめることの重要性を体で感じられた大変意義のあるものだった。ただ、まだ大連しか見ていないため、他の都市や内陸部の状況を自分の目で確認して、また偏見で終わってしまうことの無いようにしたい。

末筆になるが、毎回 ICABE のアレンジメントをして下さった九州大学の教職員の方々、岡本さんをはじめ学生リーダーを務めて下さった方々に多大なる感謝を伝えたい。

素晴らしい機会を与えて下さり本当にありがとうございました。

今回は初めての大連だったが、緯度が仙台あたりと聞いていたので、まず空港に到着して感じたことは予想以上に蒸し暑いということだった。現地の人間に聞けば、観測史上で最高気温を更新した日に小生が現地入りしたとのことで納得できたと同時に、地球規模で温暖化が進んでいるのだと実感させられた。大連は600万人が住んでいるとのことであったが、広場が非常に多く、街道には植物が多く植えられており、上海の様な人と建物が密集している息苦しさは全く感じなかった。建物もヨーロッパ調のものが多く、日本が占領する前にロシアが占領していた文化が今も残っている素敵な都市であった。食事も海鮮が豊富で美味しく、中華料理もあっさりした味付けであり、日本人好みであった。大連には日本人の駐在員が何故多いのか容易に理解できた。

小生はICABEのスケジュールが始まる2日前に現地入りし、大連の工業地帯や現地企業を訪問する機会があった。大連は未だに工場を次々と建設しており、24時間体制で大孤山を切り崩し重化学工場を建設していたが、規模の大きさに驚愕した。他にも長興島の開発やインテルの半導体前工場の建設と日本の高度成長期の時分に起きていたことが今大連で起きていると肌で感じることができ、世界で騒がれている不況は全く感じなかった。

今回の最大の目的である大連理工大とのセッションであったが、小生達のチームは明太子の中国展開についてプレゼンを実施した。事前にテーマを決める際には、前回の香港大とのセッションの教訓で得た「現地の人材は現地のことについてのテーマよりも、日本自身のことを知りたがっている」ということを念頭に置いて、福岡のモノを中国で紹介しようという観点で考えた。また一方的なプレゼンではなく、議論できるようなテーマや結論にすべきであるという観点も重要であると捉え、以上の2点から「日本で成熟している明太子を、日本食ブームが起きている中国に対して売り込むことはできないか」というテーマでマーケティング戦略を中心に説明した。大連理工大の学生にとっては興味深いテーマであつたらしく、非常に多くの質問や明太子の味や販売方法についての提案も頂けた。まさに狙った通りの展開になり、議論を楽しむことができた。中には実際に明太子事業を行ってみたいという学生もいた。そのことについてある卒業生に報告したところ、同じく海外展開を考えているとのことであり、現在はその橋渡しになればと微力ながら行動している最中である。今後もお互いの大学同士でセッションするだけではなく、実際のビジネスや人的交流が更に深まるよう小生も最大限協力したい所存である。

参加報告

報告者：6期生 岡本洋幸

ICABE への参加は 2008 年 8 月のタイ、09 年 2 月の香港、そして今回の大連で 3 回目であり、香港と大連には学生のとりまとめ役として参加した。ICABE 大連について、タイと香港での経験を踏まえて感想を述べたい。

まず、大連では学生によるプレゼンテーションが非常に盛り上がった。タイと香港ではプレゼンテーションに対する質問はわずかで、こちら語学力の問題もあり、議論を深めることが難しかった。しかし、大連理工大 (DUT) では合計 20 個近くの質疑がかわされ、じっくり議論することができた。これは、プレゼンのテーマが「食」や「育毛剤」などイメージしやすかったことや、事前に発表資料を交換したことで内容を理解するための時間があつたことが要因である。これまでの ICABE では、プレゼンの準備に時間をかける割にはディスカッションがそれほど盛り上がりなかつた。今回は、その反省を生かしたことで、中国人の発想や文化に触れることができた。

また、DUT の学生と過ごす時間が多く、学生生活や仕事の話をするにより、彼らをより深く理解することができた。プレゼン終了後は、DUT の学生が大連市内を案内してくれ、その日の夕食には、講演をされた劉曉氷教授をはじめ学生など DUT から約 15 名が参加した。翌日は、DUT の学生が夕食に招待してくれた。また、昨年の後期に DUT や東北財経大から QBS に交換留学に来ていた学生も、プレゼンに合流してくれた。

このような歓迎を受けた一番の理由は、QBS が DUT との交流を地道に続けてきたからである。劉曉氷教授からは、星野先生を初め QBS が DUT との交流に熱心であったことに言及された。DUT で助教を務める張曉紅さんには様々なサポートを受けたが、彼女は 2008 年 3 月まで九大の博士課程に在籍していた。このように QBS と DUT 間の交流の積み重ねや人的ネットワークのお陰で、今回の ICABE も有意義なものになった。

ICABE をどう生かしていくかは学生個人に委ねられるが、学生の中にはすでに ICABE で気づきを行動に変えている学生がいる。6 期の河本君 (タイ参加) は、8 月 29 日にベイサイドプレイスで福岡の留学生と地元のビジネスパーソンの交流パーティを実施し、見事に成功させた。香港 ICABE に参加した学生が中心となり、9 月 12 ~ 13 日に釜山大学ビジネススクールで学生交流を行う。このように ICABE への参加がきっかけとなり、新たな展開が生まれている。

ICABE は、MBA を目指す者が、学生という立場で交流するものである。学生だからこそ、お互い素直に語りあい、教えあうことができる。ここに、観光でもビジネスでも経験することのできない ICABE の価値があると考えられる。今後も、できるだけ多くの学生が ICABE に参加することを期待したい。

最後に、今回引率していただいた出頭先生、平松先生、サポートして頂いた QBS 事務室の高橋さんや DUT の張さん、そしてプレゼンと宴会を盛り上げた QBS の学生にお礼を申し上げたい。

日本の約 26 倍の面積を持つ中国には、各都市様々な個性がある。これまで中国でたくさんの都市を見てきたが、大連は今回が初めてであったので、楽しみにしていた。以下、今回の ICABE で感じたこと、学んだことをまとめてみた。

(1)大連の印象

大連市は、他の中国都市に比べると新しい町である。空港に着いてまず目に入ったのが、きれいに整列していた建物だった。私の持つ「中国」という印象とは少し違っていた。空港からバスで移動し、中心地へ移動するときも、道路がきちんと整備されていて、きれいな町並みが続いていた。中心地にはロシアによって造られた建物が現存しており、ヨーロッパの雰囲気が漂っていた。行き交う人々の表情も穏やかで、とてもフレンドリーな印象を受けた。

(2)JETRO 訪問

大連市の主要産業は「製造業」と「IT ソフトウェア・サービス業」が軸である。とくに IT への投資が盛んで、大連ソフトウェアパークも作られ、日本向け BPO が盛んである。中国国内の他都市と比較して、日本をよく知っている中国人が多いのが特徴である。こういった点は日本企業が進出しやすい環境を作りだしている。また、離職率が低いことも特徴のひとつであった。そのため管理職も現地従業員を適用している日系企業が多い。同じ中国でも上海では、日系企業は高い離職率に悩んでいた。それに比べると、大連は現地化が進めやすい都市である。

(4)大連理工大学とのセッション

理工大学の学生とは事前にプレゼン資料を交換していた。そのため、お互い積極的な姿勢で質問や議論に臨み、これまでの ICABE に比べ、とても充実したディスカッションができた。また、QBS の 2 チームともテーマに関するサンプルを用意していたことで、終始聴衆の興味を引くプレゼンができたと思う。こうした点は、ぜひ今後の ICABE にも活かしていきたい。セッション後、理工大の生徒とともに大連市内を一緒に観光することができた。海岸沿いを歩き、大連の良さを説明してもらいながら交流を深めることができた。前年 QBS へ来ていた留学生とも再会でき、うれしかった。

今回の ICABE は私にとって 3 度目の参加であった。海外の都市を訪れ、地元の MBA 学生との交流は何度行っても新鮮で、毎回たくさんの学びがある。2 泊 3 日という短い滞在ではあったが、大連の良さを満喫することができた。今回知り合えた理工大の学生や前年度の留学生とは今後とも長い関係を築いていきたい。

参加感想

報告者：6期生 杉本将隆

今回初めて ICABE に参加したが、観光旅行や業務出張とは比べものにならないほど有意義でエキサイティングな経験となった。

大連は初めて訪れた都市であったが、緑に溢れたヨーロッパ調の街並みに新鮮な感動をおぼえた。従来の中国の大都市とは明らかに違う印象だった。それは、大連が古代から栄えてきた都市ではなく、ロシアによる統治、日本による統治を経て、20世紀になってから計画的に開発されてきた都市だからである。ヨーロッパ調の街並みの中に、今も大事に保管されている旧満鉄の建築物や鉄道、港を見ると、歴史を大切にす中国の大局的な思想を感じることができた。そして、中国の他都市と比べて親日の度合いが強いことに驚いた。これも、「日本（満鉄）の功績なしには今の大連の発展はなかった。」という暗黙の日本観の現れであろう。

ハイライトは大連理工大学（DUT）とのディスカッションであった。我々のチームのプレゼン内容は「中国における薄毛ビジネスの可能性について」であったが、体を張ったパフォーマンスも好評であり、非常に有意義なディスカッションができた。その他のプレゼンテーションについても当初予定時間を大幅に超過するほど、非常に活発なディスカッションが行われた。過去の ICABE 参加者からは「これまでの ICABE の中で最も活発な議論が行われた。」との意見が挙がっていたが、これも日中ビジネスの可能性について、双方の熱い思いが交錯した結果であったと思う。

夜の大連も熱かった。二夜にわたり、DUT 学生と懇親会を行ったが、ここでも化学反応の連続であった。アルコール度数の極めて高い中国酒の“乾杯”は中国式歓迎の流儀。言葉や文化は違うけれど、お互いの生き方に敬意を払い、「お互いの輝かしい未来にエールを送りたい。」という気持ちが集結すると、凄まじいパワーを生み出していた。

今後はこの ICABE で学んだ感覚と人脈をビジネスの中で活かしていきたいと思う。そのためには、中国の文化や歴史に対する理解と語学（英語、中国語）に関する習得が不可欠であると痛感した。九州だけではなく、アジアで通用するビジネスパーソンになるべく自己鍛錬を続けていきたいと思う。

参加感想

報告者：6期生 宮本伸治

今回、ICABEに参加し、初めて中国に足を踏み入れることができた。訪問先である大連は、私の出身地である北九州市の姉妹都市であり、旧満州の玄関口にあたる都市である。

事前に集めた情報によると、大連では日本語教育が盛んであり、パソコン操作の問い合わせ等を受け付けるコールセンターが多く設置されているとのことであった。また、自社で利用している情報システムの開発にあたった、オフショア先の企業が存在するという情報も得ていた。

そもそも、私がQBSに入学したのは、技術者としての自分がどのようなスタンスで企業の経営に関わっていくことが相応しいのか、ということの答えを自分自身で見出すことにあった。そのための学びを進めるうちに、中国、韓国をはじめとするアジア諸国を市場として、はたまた競争相手として認知するに至り、自分の五感を通じて体験するためにICABEに参加することにしたのである。

今回、初めて海外のビジネススクールの学生と相互に発表を行う機会を得たが、先方の英会話能力のレベルの高さと知に対する厳しさを痛感させられた。おかげで、プロジェクト論文の作成に向けて、いい刺激を得られた。

おそらく、今年か来年あたりには国単位のGDPの大きさとしては、日本は中国に抜かれてしまうことになると思われる。そして、またそう遠くない将来にインドにも抜かれることになるだろう。そうした状況になっても、彼らと十分に渡り合っていけるだけの英語力と胆力を備えていけるように、更に自分の精神と能力を磨いていかなければならないと改めて考えさせられた。

残念ながら、2泊3日の短期間の研修旅行であったが、日本人にゆかりのある観光スポットを数か所回ることもできた。個人的な印象としては、大連の街全体としては活気に溢れており、治安もそう悪くないように感じた。今回は、今の中国というものを肌で感じることができ、貴重な体験を得ることができたと思っている。

最後に、引率していただいた出頭先生、平松先生、および事務局の方、現地での通訳を引き受けて頂いた張さん、そして岡本リーダーをはじめ、同行した6・7期生の友人の皆さんに、この場を借りて改めて感謝の念を伝えたい。

参加報告

報告者：6期生 八尋大八

今回の ICABE は前々回のタイ以来 2 度目の参加となった。私にとっては今回が初めての訪中ということで、期待に胸を膨らませての大連訪問となった。百聞は一見にしかずといわれるが、実際に自分の目で中国の人々や経済発展の様子を見ることができて大きな刺激になった。そして想像以上に大連の町が美しく緑が豊かであったことに驚き、どこか福岡の町とも似ていることが、私と大連の距離をいっきに縮めてくれた。また、DUT の講義では大連の経済発展の歴史について戦争と日本とのかかわりについても述べられ、両国間での悲しい過去を思い出したが、劉先生からは日本が大連の発展に大きく貢献したという説明がなされ、過去からの我々との関係を非常に肯定的に捉えておられることに感動した。これからも日本と大連が経済的な協力や発展を通してより一層親密な関係になれることを確信するとともに、今後のわれわれにとって中国という国がいかに大きな存在であるかを感じずにはいられなかった。

そして今回は両大学間でのプレゼンテーションも盛り上がり、活発な議論が交わされたことも思い出として付け加えておきたい。岡本リーダーを初めとする ICABE 委員の方々のご尽力と準備により、事前に内容を交換し合い確認と質問を準備できたことが要因で、大きな改善点であったと思う。このように ICABE 自体も回を重ねるごとに改善され、QBS の名物イベントとして海外との交流の窓口になることを期待します。関係者のみなさまありがとうございました。

大連理工大学

- ディスカッションで感じたこと
 - ・DUT側：発想が豊で、柔軟な視点を持っていることに強く魅力を感じた。
 - ・QBS側：提案という形ではQBSの方がより具体性があったと思う。
- 英語力が非常に高い。
- 私の所属しているパナソニックが大連にソフトウェア会社を設立したが、多くの人材が大連理工大から入学している。しかし、ビジネススクールでは、技術系が特に多いというわけではなかった。

JETRO

- 大連では、日本語教育が盛んで、日本向けBPO (business process outsourcing) が大きな産業となっている。

遠東デジタル

- 企業概要
 - ・日本企業である日立向けBPOが主な業務
 - ・CMMレベル4、2004年中国ソフト輸出企業トップ20
- 日本企業が海外で抱える人材流出問題(育成したのち外資系に転職する)と同じ課題を持っており、中国においては人材確保が難しいことを実感した。日本国内では、そのような課題があまりないため、海外に進出する際に大きな課題である。
- 一番大切なのは「コミュニケーション」という部分に、非常に共感し、同じアジアとして強い協力関係を構築できると確信した。
- 社員は、日本に出向させたり、日本のソフトウェア資格を獲得するなど、人材育成に関して、非常にコストをかけている。資格の保有者数の割合なども、自社のそれよりもはるかに高いと思われる。
- ソフトの売上に応じて、減税される制度は、企業のモチベーションを大きく上げるものと思われる、このような政策を実現できる中国では、企業がグローバルに成長する大きな要因であると思われる。

感想

大連の学生が親日家であったのは、非常にうれしく思った。日本企業がグローバル企業を目指す上で、大連と協力することは、大きな強みであると感じた。

大連の印象

- ・ ロシア時代からの古い建築物と近年の高層ビルを上手く融合させた街づくりとなっていて、道路や歩道、街路樹などの整備状況が良く、全体的に整った街の印象を受けた。きれいな印象を与える街づくりとして、広場と緑の効果が大きいことを再認識。
- ・ 経済技術開発区を設け日系企業も多く進出し、また、ソフトウェアパークを設置し、IT・ソフトウェア分野の成長に力を入れ、企業誘致を積極的に展開している。大胆な税制優遇措置など経済成長にかける行政側の本気度が感じられ、BPOやソフトオフショア開発については、まだまだ今後の成長の余地が感じられる。
- ・ また、このような日本向けBPOやオフショア開発のために、日本語教育などの人材育成に力を入れている。日本企業が中国進出に重点を置きながらも中国語教育が進まないことに比べたら、中国側の熱心さを感じた。
- ・ 大連の人々が歴史的背景にも関わらず、対日感情が良いというのは意外であった。日系企業の進出による日本人の多さ、過去に日本が大連の経済発展に貢献してきたことになど日本人に対する馴染みの深さが寄与していると思われる。
- ・ 東北地方は中国主要都市の中でもインフラ整備は遅れている方で、今後の整備計画が目白押しで、ちょうど経済成長の途上にあるという印象。街中では建設中の物件が多く見られ、不動産価格も上昇していると聞き、今後ますますの開発、成長が期待される。
- ・ 外資の飲食店進出が進んでいて、日本からの進出店も「吉野家」「王将」「味千ラーメン」やその他の日本食店を街中で見かけたが、日本で展開している店舗とはメニュー構成やコンセプトが全く別で、地域に合わせてカスタマイズされていた。大連の人々は一般的にこれらの日本食飲食店は価格が高いという印象を持っているようである。したがって今後、大衆層向けにより安価な日本食の定着を狙えるポテンシャルはあると考えられる。また逆に、リッチ層をターゲットにした高級飲食店はどうかと個人的に考えているが、それについてのヒアリング材料はあまり得られなかったので、今後の勉強としたい。

大連理工大学とのセッションについて

- ・ DUT生の英語力の高さはもちろんだが、周囲を気にせず独自の意見を積極的に主張する姿勢に接し、良い意味での凶々しさを学び、これが中国の原動力だと感じた。ビジネススクールに臨む姿勢として見習う点があると思った。
- ・ QBS側のプレゼンに対し、「今、どのようにすればいいのか」「どうすれば出来るのか」といった反応があり、すぐにビジネスにつなげる考え方が身についていることを感じた。私たちは勉強のための勉強、プレゼンのためのプレゼン止まりになっている傾向があり、主体的にビジネスを興す気概で勉強していかないといけないと刺激された。

最後に

今回、初めて海外のMBAと触れることにより多くの刺激を得ることができた。自分の勉強不足、勉強やビジネスに対する貪欲さの欠如を思い知らされ、発奮する良い機会となった。また、中国マーケットへの好奇心を高めることができたのも収穫だった。

貴重な機会を与えて下さり、素晴らしい時間を共に過ごした先生、仲間へ感謝します。

参加感想

報告者：7期生 西野晶子

今回の ICABE は、私にとって初めての中国訪問であった。中国経済の発展についてはメディアで頻りに報じられているが、今回の現地企業の訪問や DUT の皆さんとのセッションなどを通して、自分の肌で直接そのエネルギーを感じることができ、大変貴重な経験となった。特に印象に残ったことを、以下に記したいと思う。

1. 大連の印象

大連に到着し、まず、自動車と人の多さに驚いたが、道路が広いことや広場・公園が多いことなどから、街全体としては美しく、広々とした印象であった。また、日本統治時代の旧大和ホテルや満鉄大連本社などの古い建物が残されている一方で、建設中の高層ビルも数多く立ち並び、今後の発展が感じられる街であった。

歴史的な背景から、半日感情が強いのではないかとということが気になっていたのだが、JETRO の方によると、日露戦争の頃に教育や街づくりなどで日本が貢献した部分も大きく、そのような感情はないとのことで、これは嬉しい驚きであった。また、近年、多くの日本企業が大連へ進出しており、日本がとても近い存在とのことである。特に、今回の金融危機においても日本企業は逃げ出さなかったため、有難く思われているという話が印象的であった。

2. 都市の発展と日本企業の進出について

大連では、ソフトウェアパークをはじめとするハード面の整備と、積極的な人材育成・人材交流というソフト面の整備に力が注がれている。また、市政府が、国内外からの企業誘致に力を入れているとのことであるが、都市の発展にはこのような官・民の連携が欠かせないものであり、見習うべき点が多いと感じる。

大連は、歴史的な背景や日本企業の進出などにより、日本への関心が高い地域であることに加え、粘り強いという人物の特徴があるとのこと。このような要素は、日本企業との連携がうまくいく重要であると思われ、今後ますますの成長が期待される中国へ日本企業がアプローチする際に、大連は見逃せない地域だと考える。

2. プレゼンと DUT 訪問

プレゼンの準備にあたっては、これまであまりお話しする機会のなかった6期の方とも交流を持つことができた。準備・プレゼンを通して、自分の力不足を強く感じると同時に勉強になったことも多く、これをぜひ、今後の学びや仕事に生かしていきたいと思う。

また、DUT 訪問の際は、皆さんが私たちを温かく迎えてくださり、明るい雰囲気セッションを進めることができた。活発に質疑応答が行われ、アイデアを実際にビジネスとして立ち上げ成功させるためにはどうすべきか、という実践的に物事を考える姿勢が強く感じられ、よい刺激となった。

最後に、今回の ICABE では先生方をはじめ、皆さまには大変お世話になり、ありがとうございました。この場をお借りして、お礼申し上げます。

参加感想

報告者：7期生 秦野久実子

今回始めて中国を訪問した。現地での視察や交流を通して、活気に満ちた大連で貴重な体験ができたと考える。以下、JETRO 大連、大連遠東数碼有限公司及び学生交流を通して感じたことを述べる。

(1) JETRO 大連にて

「今回の世界的な金融危機で日本企業だけが中国から逃げ出さず、大変感謝されている。」という話があった。特に外国とビジネスを行うには長期的な視点に立った持続可能な関係と信頼を築くことが大事であると改めて感じた。また、大連が目指す経済指標の一つに大連港を「北東アジアの国際流通センターとする。」とあり、既に世界140国余りの国と地域の海運航路を持っているという。全ての研修後、大連港を見渡せる機会に恵まれた。大連港の巨大な埠頭に加えて、その反対側にはさらに大規模な大窯湾新港が建設中であるという。この巨大な物流インフラを目の当たりにして、九州がアジアの玄関口となるためには、中国に続々と集まるモノとヒトの流れを九州にも集約させる機能を備え、かつ九州からも発信していく何らかの手段を講じる必要があるという思いを抱いた。

(2) 大連遠東数碼有限公での事業紹介を通じて

政府から「ハイテク企業」や「国家重点ソフト開発企業」の承認を受け税金の免除を受けていると伺った。この企業に限らず、現在中国政府がソフトウェアなどのハイテク産業の育成に大変力を入れているという印象を受けた。また当社は、言語や商習慣の問題を回避するために、社員の日本派遣や社内日本語研修を実施し、コミュニケーション能力形成にも力を注いでいる。他者と共生するという柔軟な対応が中国企業では既に始まっており、多数の外資企業がひしめきあう大連で、各企業の事業特色の競争力のみならず、企業独自の付加価値付けを積極的に行っているという印象を受けた。

(3) 大連理工大(DUT)とのプレゼンテーションを通じて

DUT学生からの積極的な質疑を通じて、彼らは常に高いビジネス意識を持っていると実感した。QBSから日本企業の紹介等を行ったのだが、「そのビジネスを中国で成功させる為に一番必要な要素は何か。」など、それぞれの立場をすぐさま当事者に置き換え、ビジネスチャンスとなり得るかどうかを考えているようであった。厳しい質問もあり現実味を帯びたDUT学生の意見に身が引き締まる思いがしたと同時に、高いビジネス志向を携えたDUT学生との交流はとても刺激的で貴重な経験となった。

【所感】

以前より九州の中小企業がなかなかアジア進出できないのには知的財産管理の問題、販路拡大の難しさの問題、商慣習の問題、言語の問題があるのではないかという認識を持ち、今回のICABEに参加した。短い期間ではあったが、大連の経済発展の勢いや活気を体感し、また現地交流、引率して下さった教授やICABEメンバーとの交流を通じて、貴重な体験と様々な気づきを得ることができたと実感している。

(1) 大連について

一つひとつの建物の作りが大きく、夏季ダボス会議の直前ということもあり、道路脇の街路樹や公園の芝生など手入れが行き届いていて、経済発展の活力を感じました。また個人的には、戦後満州からの引き上げ船が出航した大連港が印象的で、日本が満州時代に建設した建物や鉄道などが今なお使用されていることに、とても驚きました。JETROの方もいわれていたように私たちが訪問した日は、大連にとっても歴史的な暑さだったので、日本のような蒸し暑さはありませんでしたが、猛暑の中の研修でした。

(2) 大連理工大学とのセッションについて

私たちのチームがプレゼンした「Food & Clean Energy」の大連における明太子ビジネスチャンスは、明太子の被り物や明太子の試食を甲斐もあり、学生たちが興味を持って聞いてくれたおかげで、とても活発な議論が行う事ができたと思います。また、大連市が北九州市の友好都市であることも影響しているのかもしれないが、エンジニア系の学生は自然エネルギーについても強い関心を持ってくれました。

また、大連理工大学の学生が私たちのプレゼンに対して投げかけてくる質問は「始めるとしたらどの程度の費用が掛かるのか」とか「作り方のノウハウはどのように得られるのか」など非常に具体的なものが多く、チャンスがあれば何かを始めたいという気持ちが強いことを感じ、とても刺激になりました。

(3) ICABE 学生交流プロジェクトについて

2泊3日という短い期間でしたが、大連理工大学とのセッションや企業訪問、満州鉄道の終着点も見学するなど、大変充実した研修だったと思います。大連理工大学の学生も私たちと同じように働きながら学んでいる社会人学生で、国を超えて勉強と仕事の両立について話せたことも良かったと思います。

また、現地の学生やガイドはとても親日的で、私は中国に対する印象を変えることができました。事前準備や大連での滞在を通じて、7期生だけでなく6期生とも交流できたことも良い機会だったと思います。

参加感想

報告者：7期生 丸山智恵子

筆者はこれまでに香港・広州などを訪れたことがあり、東南アジアあるいは南太平洋地域の華僑の人々との交流の経験があるが、大連の人々からはそれとはまったく違った印象を受け中国の多様性を再認識した。

大連に到着して意外だったのは、人口600万の中国東北3県を代表する大都市にもかかわらず、国際空港の施設が貧弱で照明も暗かったことである。大連市内中心部の活気をみるにつけ、この印象はより強いものとなっていったが、訪問先で大連は以前電力不足に悩まされたことがあり、そのため電力量が豊かになった今でも節電の習慣が続いているのだという。豊かな資源に恵まれた大連でも節電意識が高いことに比べて、海外への資源依存度が高い日本で、これほどふんだんに照明を使うことを見直すべきだろう。

JETRO大連事務所で聞いた話のうち、食品加工会社では日本人技師指導のもと非常に衛生的な環境で製造が行われていると知り意外な感じがしたが、昨今は中国産食品に対する厳しい見方が一般的であるが、一部のモラルに欠けた企業の評判がその国の産業全体に大きな悪影響を及ぼすことを痛感した。逆説的かもしれないが、中国政府は国内製造業に対して厳しい基準適用を徹底することが、真面目にビジネスに取り組んでいる業者を保護することになるのではないかと思った。

大連理工大学の交流行事では、ウー教授による大連経済史の講義は大連の歴史あるいは産業の概要を理解する上で大変参考になった。学生による研究発表では、お互いに母国語ではない英語でのコミュニケーションであったが、日本人と比べると外国語においても物おじしない非常に積極的な態度が印象的で、彼らとの交流は大変良い刺激になると感じた。後期にこの大学からの交換留学生と机を並べて勉強することがとても楽しみである。

大連へは初めての渡航であったが、通常の観光旅行ではできない見聞を広める機会に恵まれ貴重な経験となった。昨年秋から始まった世界的な経済危機はまるで全世界を覆い尽くしているかのように言われているが、大連の活気にこの不況を乗り切る活路が見いだせるような気がした。福岡とも近く魅力的な市場であることから、今後も活発な交流を継続していきたい。